分譲宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富山市

# 四方北窪遺跡

２０００年８月

富山市教育委員会

# 例　　言

1　本書は、富山県富山市四方北窪字永代割地内に所在する四方北窪遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、分譲宅地造成工事に伴う調査として、株式会社太陽興発（代表取締役　見附彰）の依頼を受け実施した。

3　調査は、富山市教育委員会が主体となり実施した。調査にあたっては、山武考古学研究所（所長　平岡和夫）が富山市教育委員会の指導のもとに実施した。

調査期間、調査面積、担当者は下記の通りである。

現地調査　期間　平成９年９月８日～同年10月15日

面積　548㎡（対象面積24.939㎡）

担当　山武考古学研究所　桐谷　優

整理調査　期間　平成12年５月10日～同年６月30日

担当　山武考古学研究所　折原洋一　桐谷　優

4　発掘調査により得られた資料は、全て富山市教育委員会に保管してある。

5　本書の執筆分担は下記の通りである。

第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ章　桐谷優　折原洋一　　第Ⅱ章　古川知明

6　発掘調査から報告書刊行に至るまで、以下の関係機関に御協力いただいた。

㈱太陽興発、㈱金谷工務店、㈱日本テクニカルセンター

7　発掘参加者は下記の通りである。

伊藤久志・田中崇・嶋田英路・波多野敬・寺田道代・上楽マキ・北村美穂・小西正一・若林健
加藤力・河野邦子・浅井由香・出戸雄二・永瀬裕二・小向啓介・奥田靖子・米沢加代子・谷脇浩
溝口ルミ子・慶長幸子・杉林雄一・伊藤浩一郎・西島好子・黒川七雄樹・辻匡陛・岩井宏高

8　調査で使用した略語・記号については下記の通りである。

ＹＫ：四方北窪遺跡　　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＤ：溝　　ＳＫ：穴　　Ｐ：小穴

9　平面図に示した北方向は、真北を示す。

# 目　　次


Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
Ⅱ　調査の経緯……3
Ⅲ　調査の概要
　1　調査の方法……5
　2　調査の経過……5
　3　基本層序……5
Ⅳ　遺構と遺物
　1　遺構……7
　2　遺物……11
Ⅴ　まとめ……12
　報告書抄録……13

第１図　四方北窪遺跡と周辺の遺跡……2
第２図　明治43年　陸地測量部迅速図(1：20,000)より東岩瀬・四方……3
第３図　発掘調査区域図……4
第４図　基本層序模式図……5
第５図　遺構全体図……6
第６図　ＳＢ－１……7
第７図　ＳＫ－１～13……9
第８図　ＳＫ－14……10
第９図　ＳＤ－１・２……10
第10図　出土遺物……11

# Ⅰ．遺跡の位置と環境

本遺跡（１次地区）は、富山市街地の北方約７㎞の海岸部、富山市四方北窪地内に所在し、当遺跡の南方約40ｍ地点には四方北窪遺跡（以下「２次地区」という）が調査されている。

遺跡は、神通川左岸の海岸砂丘内側の低湿地上に立地し、現在の神通川河口から西へ1.8㎞、海岸汀線からは約260ｍの距離にある。標高は現状で1.7 ～2.0ｍ、遺構確認面で1.1 ～1.3ｍを測り、地勢は南方向に向かって僅かに高さを減じている。

調査区内の基盤層（地山）は灰オリーブ色粘質土で、この層より約80㎝下がった標高０ｍ前後では青灰色粗砂層となっており、２次地区ではこの層間より激しい湧水が確認されている。また、この灰オリーブ色粘質土は、粘土質にもかかわらず比較的圧縮性が低く、建物を建てようとした場合の基礎構造としては意外に適していたと思われる。

遺跡の東側はかつての神通川流路で、シルト質砂土を主体とする河川堆積物が堆積している。「越中記」によれば江戸時代万治元年（1653）の大洪水で東岩瀬に流れができ、その後の寛文八～九年（1668～1669）の洪水以後、本流は東岩瀬側となった。これがほぼ現在の流路であり、西岩瀬側の川は後に古川と呼ばれ、現在は縮小して細い流れとなっている。

神通川河口付近は古代には新川郡石勢郷に含まれており、『延喜式』や『和名類聚抄』に見える「磐瀬駅」は、神通川を挟んで東岩瀬とするか西岩瀬とするか見解が分かれている。

西岩瀬は、日本最古の海商法「廻船式目」（貞応二年（1223））に記載される三津七湊のうちの一湊でもあり、古代から中世以来、宿駅・港あるいは渡し場として栄えた。この繁栄は享保年間頃まで加賀藩の米積出港として利用されるなどして続くものの、慶長十四年（1609）に前田利長が、従来富山と岩瀬にあった舟渡場を新たに草島・千原崎間に設けた時より衰微し、前述した寛文八～九年の洪水以後は船主・船宿の多くが東岩瀬に移った。

西岩瀬は現在、海岸が諏訪神社の北側約110ｍまで接近しているが、寛文年間（1661～1673）は西岩瀬町域の北端から海岸まで四百間あったとされる。また、海禅寺所蔵の貞享年間（1684～1688）の「西岩瀬古図」によると、現在の汀線あたりが当時の本通りで、そこからさらに北側へ町屋や道路が延びている様子が描かれている。これらの資料は、繁栄を極めたその当時の多くの文化遺産が、海岸浸食によって次第に消滅していった様子を伝えるものであろう。

周辺の遺跡を概観すると、縄文時代では後期～晩期の四方荒屋遺跡（２）や中期～晩期の千原崎遺跡（９）がある。いずれも遺構を伴わず出土遺物も少量で、集落の形成は確認されていない。弥生時代中期から古墳時代前期（月影期）にかけては大規模な集落が形成され、江代割遺跡（５）や四方荒屋遺跡では竪穴住居跡等が検出されている。いずれも弥生時代後期の洪水により埋没しているが、月影期には再び集落が形成されている。

奈良・平安時代には、四方荒屋遺跡、四方西野割遺跡（３）に加え、対岸の河岸段丘上に官衙的様相を示す米田大覚遺跡や豊田大塚遺跡が出現する。米田大覚遺跡では、柱掘形が方形平面で一辺が１ｍ前後の大型掘立柱建物に溝・井戸等が規則的に付帯し、墨書土器も多数出土している。豊田大塚遺跡では、律令祭祀具である人面墨書土器や木製人形が溝より出土し、律令期の祭祀場と考えられている。また、両遺跡は直線距離にして約１㎞程で、相互関連が予想される。

中世では、本遺跡と２次地区の他は遺跡として確認されていないが、周辺遺跡で中世陶磁器が採集されている事や、上記した歴史背景より、中世から近世に亘る遺構数が更に増加することは明白であろう。

**第１図　四方北窪遺跡と周辺の遺跡**（１：25,000）

1　四方北窪遺跡（中世／集落跡）
2　四方荒屋遺跡（古代～中世／集落跡・畑跡）
3　四方西野割遺跡（平安～中世）
4　四方背戸割遺跡（弥生～古墳／集落跡）
5　江代割遺跡（弥生～古墳／集落跡）
6　打出遺跡（古墳～中世）
7　今市遺跡（縄文～中世／集落跡）
8　草島遺跡（中世～近世）
9　千原崎遺跡（近世初期／集落跡）

※　（年代／種別）は主たるもの

# Ⅱ．調査の経緯

四方北窪遺跡は、昭和63年から平成３年に行なわれた市内分布調査で新たに発見された遺跡である。遺跡は平成５年３月発行『富山市遺跡地図（改訂版）』に登載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られることになった。

平成８年３月、株式会社太陽興発より四方北窪字永代割地内の埋蔵文化財所在確認依頼が提出された。事業予定地には四方北窪遺跡が所在し、工事予定地のほぼ全体が遺跡に含まれていたため、これらを対象とする試掘確認調査を実施することとなった。

試掘確認調査は、24,939㎡を対象とし、平成８年５月８日から同年５月15日まで実施した。調査の結果、予定地の西側部分2,810㎡に遺跡が所在することが明らかになった。

この調査結果に基づき、遺跡の所在を確認した部分の保護措置について株式会社太陽興発と協議を重ねた結果、工区除外とされた2,262㎡を除く548㎡について発掘調査を行なうこととなった。また、発掘調査は市教育委員会による実施が希望されたが、市教委においては十分な調査体制がとれないため、民間委託を活用して行なうこととし、市教委の監理のもと有限会社山武考古学研究所（所長　平岡和夫）が発掘調査を担当することとなった。

この旨を記載した協定書は、市と㈱太陽興発との間で平成９年８月４日に締結した。

調査は平成９年９月８日に着手し、平成９年10月15日まで行った。

第２図　明治43年　陸地測量部測量迅速図（１：20,000）より東岩瀬・四方

第３図　発掘調査区域図（１：2,500 ）

# Ⅲ. 調査の概要

## 1　調査の方法

遺跡地は、既に市教委によって試掘調査が実施されており、遺構確認面までの深さ、出土遺物、遺物包含層の有無等が詳細に把握されていた。したがって、本調査はこの試掘調査成果を踏まえて実施した。

調査はまずバックホーを導入し、耕作土（第１層）の除去を行った。第２層の黒色土は古代から近世に亘る遺物を包含しており、公共座標（５×５ｍ）を設定した後に人力で掘り下げた。第３～４層は基本的に遺物を包蔵しておらず、再びバックホーを導入して、遺構確認面である第５層まで掘り下げた。この段階で再び公共座標（５×５ｍ）及び水準測量を実施した。座標杭には、北から南へ１・２・３……、西から東へＡ・Ｂ・Ｃ……と仮称を付し、各北西隅の杭呼称をそのままグリッドの呼称として用いた。遺物包含層からの出土遺物は、各グリッド毎に一括で取り上げた。

遺構の掘り下げは、遺構の形態・規模に応じて半割もしくは四分法で掘り進め、遺構内に遺物が検出された場合は、出土位置・高さを記録する事とした。

遺構実測図は、断面図が１／20縮尺、平面図は航空測量によった。

写真撮影は、３台のカメラ〔35㎜（白黒・リバーサル）・６×７（白黒)〕を使用し、各段階に於いて実施した。

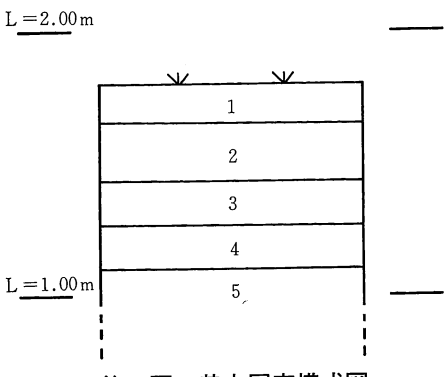
## 2　調査の経過

調査は、平成９年９月８日から同年10月15日まで実施した。調査経過の概略は以下の通りである。

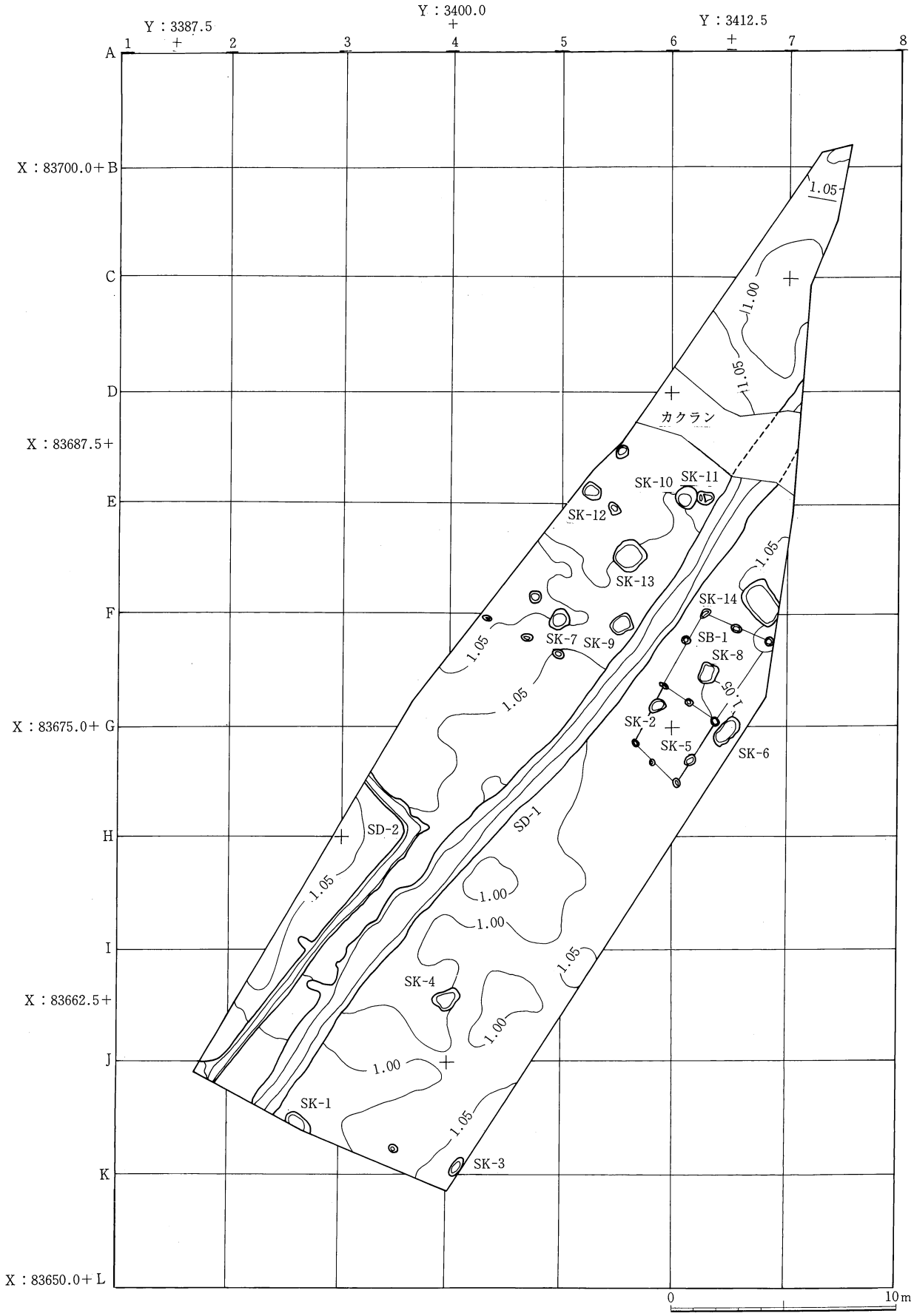
９月８～10日　調査区域を確定した後にバックホーを導入し、表土除去を行う。
11～25日　公共座標及び水準測量を実施した後に、遺物包含層調査を実施する。
29～30日　再度バックホーを導入し、遺構確認面までの排土を行う。
10月　１日　遺構確認状況の写真撮影を実施した後に、再度の公共座標及び水準測量を実施。
２日　検出された遺構は、溝２条、建物跡１棟、穴14基、小穴７基である。調査区の南側より遺構調査を開始する。
３～９日　遺構調査（半割、断面実測、断面写真、完掘、完掘写真）を実施する。
13日　航空測量の為の準備作業（遺構及び調査区内の清掃、対空標識の設置)。
14日　航空測量実施。
15日　市教委より調査終了確認を得る。残務整理を行い、調査の全てを終了する。

## 3　基本層序（第４図）

１層　水田耕作土　　現水田（15～20㎝）
２層　黒色土　　古代～近世の遺物包含層（20㎝）
３層　灰褐色土　　弱粘性、微量の炭化粒子含む（15㎝）
４層　暗褐色土　　弱粘性、微量の炭化粒子含む（17㎝）
５層　灰オリーブ色粘質土　遺構確認面（地山）



第４図　基本層序模式図




第５図　遺構全体図（１：250）

# Ⅳ. 遺構と遺物

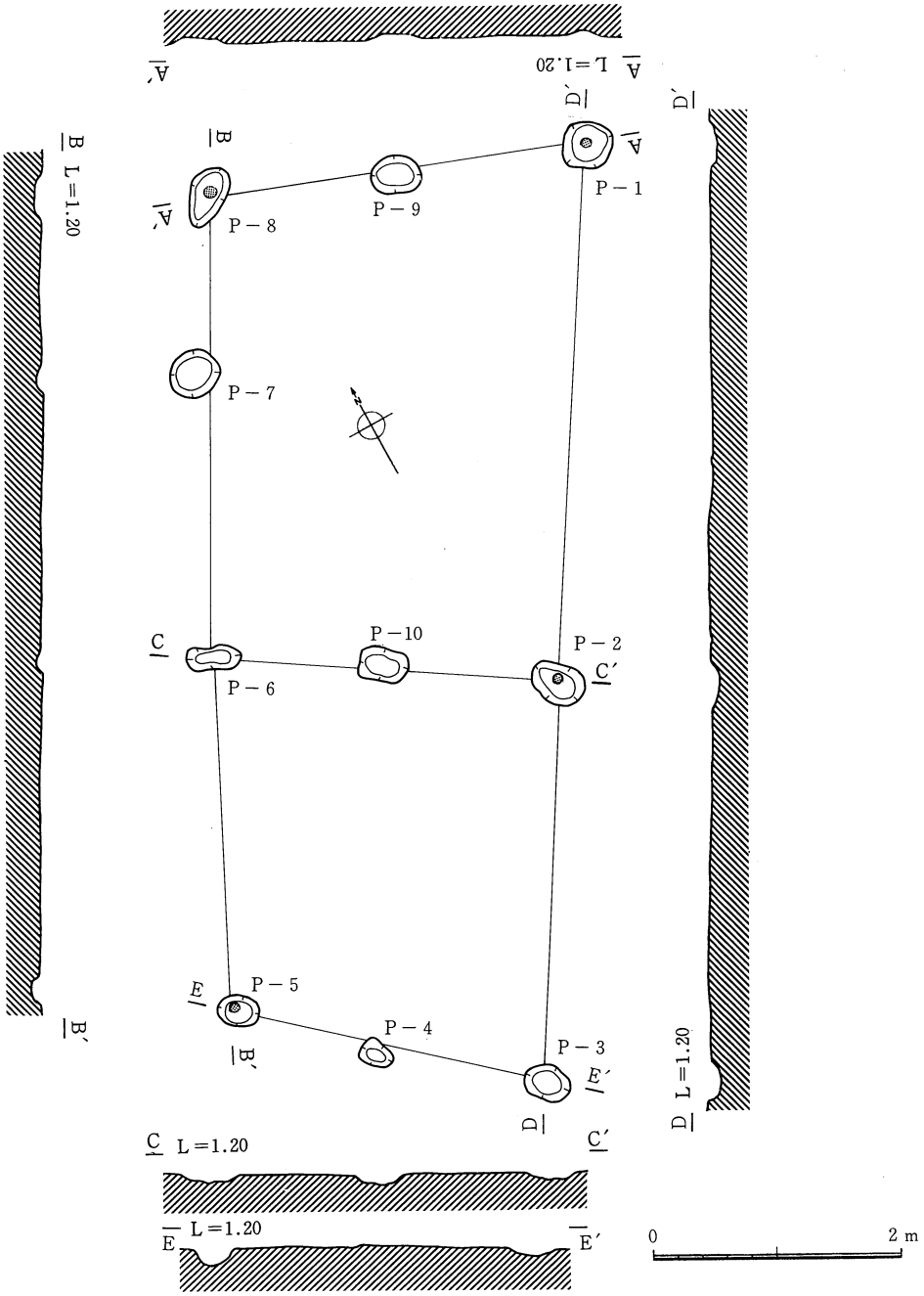
## 1　遺　構

今回の調査では、中世の溝２条、掘立柱建物跡１棟、穴14基、小穴７基が検出された

### 掘立柱建物跡

ＳＢ－１　第６図　図版１－２

２間×２間の総柱建物跡である。建物の規模・形状は東辺7.90ｍ、西辺6.98ｍ、北辺3.50ｍ、南辺3.40ｍの南北に細長い台形を呈している。主軸方向はＮ-28°-Ｅである。柱穴は長軸長29～50㎝、短軸長20～39㎝、深さ５～10㎝と小規模で、平面形状も楕円形～方形と一定していないが、Ｐ１・２・５・８の底面には柱のあたりが認められている。構築時期は中世と思われる。




第６図　ＳＢ－１

穴

ＳＫ－１　第７図　図版２－１

調査区南部のＪ－２区に位置する。南部が調査区外となるため規模形状は不明だが、長軸長123㎝×短軸長60㎝以上の楕円形を基調とすると思われる。断面形は深さ20㎝の鍋底状を呈す。

ＳＫ－２　第７図　図版２－２

調査区中央部のＦ－５区に位置する。長軸長87㎝×短軸長43㎝の細長い楕円形を呈する。深さ17㎝で、底面はやや凹凸が見られる。

ＳＫ－３　第７図

調査区南部のＪ－４区に位置する。平面形は長軸長77㎝×短軸長50㎝の楕円形を呈する。断面形は深さ15㎝の鍋底状で、底面はやや凹凸が見られる。

ＳＫ－４　第７図　図版２－３

調査区南部のＩ－４区に位置する。平面形は長軸長112㎝×短軸長93㎝の不整形を呈する。深さは20㎝で、底面はやや凹凸が見られる。

ＳＫ－５　第７図　図版２－４

調査区中央部のＧ－６区に位置する。平面形は長軸長58㎝×短軸長49㎝の不整形を呈する。深さは15㎝である。

ＳＫ－６　第７図　図版２－５

調査区中央部のＧ－６区に位置する。平面形は長軸長145㎝×短軸長73㎝の長方形を呈する。断面形は深さ11㎝の皿状である。

ＳＫ－７　第７図　図版２－６

調査区中央部のＦ－４区に位置する。平面形は長軸長92㎝×短軸長88㎝の不整形を呈する。断面形は深さ23㎝の鍋底状である。

ＳＫ－８　第７図　図版３－１

調査区中央部のＦ－６区に位置する。平面形は長軸長94㎝×短軸長80㎝の長方形を呈する。断面形は深さ10㎝の皿状である。

ＳＫ－９　第７図　図版３－２

調査区中央部のＦ－５区に位置する。平面形は長軸長91㎝×短軸長65㎝の長方形を呈する。断面形は深さ７㎝の鍋底状を呈し、底面の南部に長軸長37㎝×短軸長35㎝×深さ17㎝のピットが存在する。

ＳＫ－10　第７図　図版３－３

調査区中央部のＤ・Ｅ－６区に位置する。平面形は長軸長98㎝×短軸長92㎝の不整円形を呈する。断面形は深さ15㎝の皿状を呈する。

ＳＫ－11　第７図　図版３－４

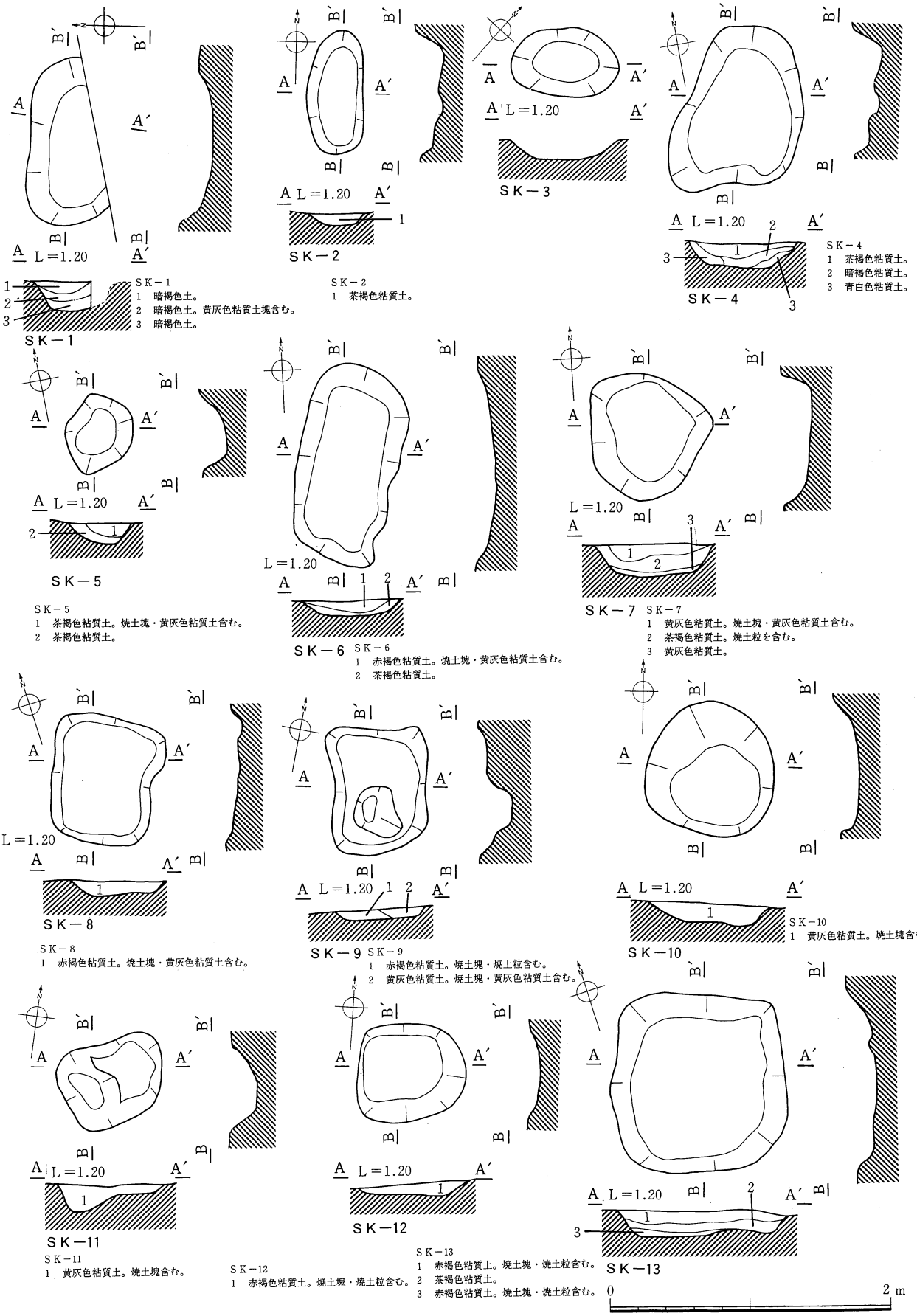
調査区中央部のＤ－６区に位置する。平面形は長軸長77㎝×短軸長62㎝の不整形を呈する。深さ18㎝で、西部が深くなる。

ＳＫ－12　第７図　図版３－５

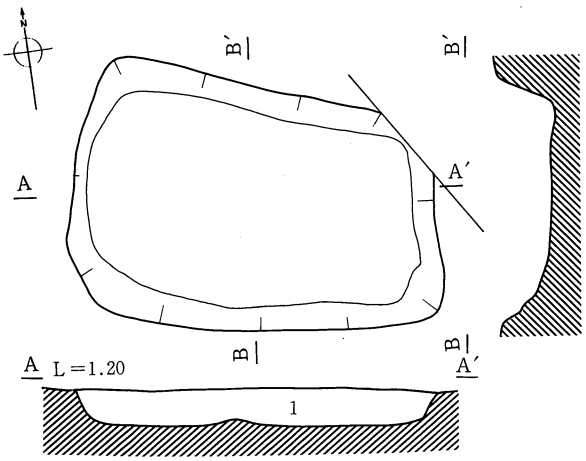
調査区中央部のＤ－５区に位置する。平面形は長軸長77㎝×短軸長70㎝の不整方形を呈する。断面形は深さ10㎝の皿状を呈する。

ＳＫ－13　第７図　図版３－６

調査区中央部のＥ－５区に位置する。平面形は長軸長127㎝×短軸長126㎝の隅丸方形を呈する。断面形は深さ19cm の鍋底状を呈する。


SK－1
1 暗褐色土。
2 暗褐色土。黄灰色粘質土塊含む。
3 暗褐色土。
SK－2
1 茶褐色粘質土。
SK－3
SK－4
1 茶褐色粘質土。
2 暗褐色粘質土。
3 青白色粘質土。
SK－5
1 茶褐色粘質土。焼土塊・黄灰色粘質土含む。
2 茶褐色粘質土。
SK－6
1 赤褐色粘質土。焼土塊・黄灰色粘質土含む。
2 茶褐色粘質土。
SK－7
1 黄灰色粘質土。焼土塊・黄灰色粘質土含む。
2 茶褐色粘質土。焼土粒を含む。
3 黄灰色粘質土。
SK－8
1 赤褐色粘質土。焼土塊・黄灰色粘質土含む。
SK－9
1 赤褐色粘質土。焼土塊・焼土粒含む。
2 黄灰色粘質土。焼土塊・黄灰色粘質土含む。
SK－10
1 黄灰色粘質土。焼土塊含む。
SK－11
1 黄灰色粘質土。焼土塊含む。
SK－12
1 赤褐色粘質土。焼土塊・焼土粒含む。
SK－13
1 赤褐色粘質土。焼土塊・焼土粒含む。
2 茶褐色粘質土。
3 赤褐色粘質土。焼土塊・焼土粒含む。
L＝1.20
0
2 m

第7図　SK－1～13




SK－14
1　赤褐色粘質土。焼土塊・焼土粒含む。

第8図　ＳＫ－14

ＳＫ－14　第8図　図版4－1

調査区中央部のＥ－6区に位置する。平面形は長軸長290㎝×短軸長195㎝の長方形を呈する。断面形は深さ50㎝の鍋底状を呈する。

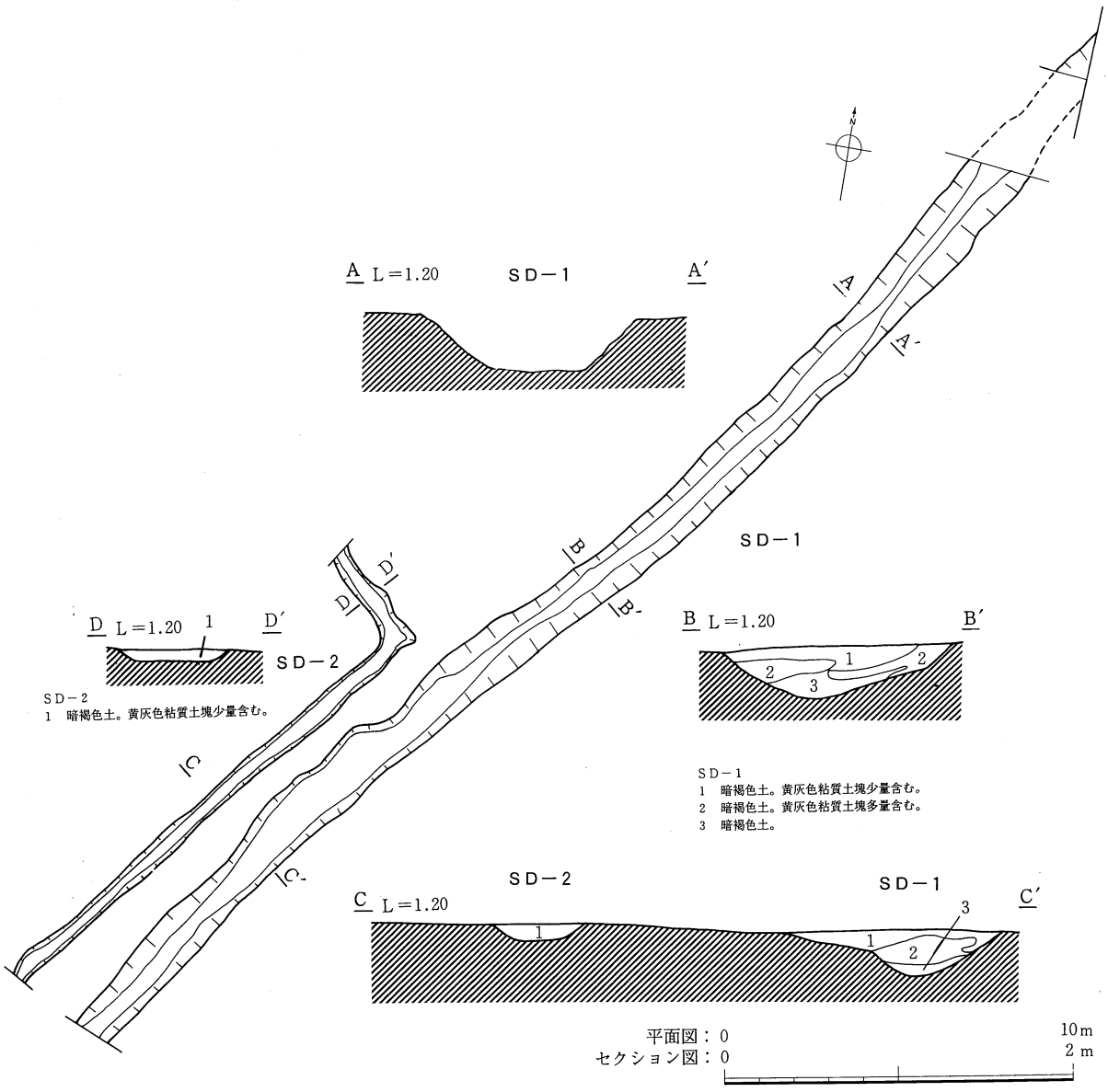
**溝**

ＳＤ－1　第9図　図版4－2

調査区を南西～北東方向に縦断し、南西端と北西端は調査区外へと延びている。断面形は幅130～165㎝×深さ25～35㎝の逆台形～皿状を呈する。

ＳＤ－2　第9図　図版4－2

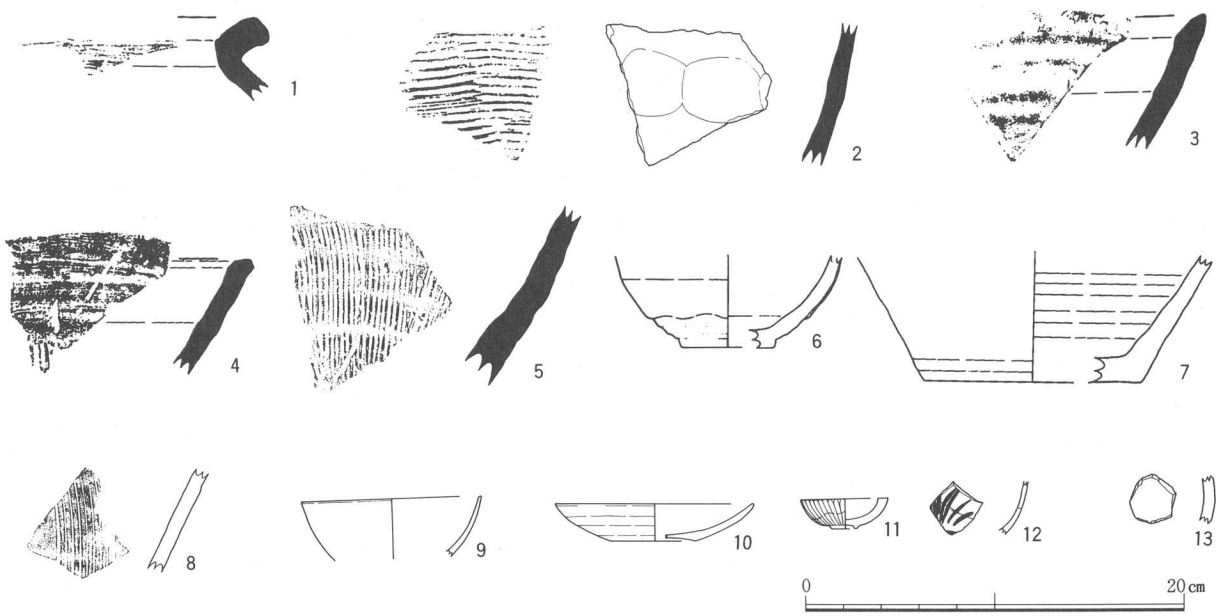
調査区の南西部に位置する。南西から北東に延びた後、北西方向へと直角に曲がる。断面形は幅55～63㎝×深さ7～10㎝となる。




SD－2
1　暗褐色土。黄灰色粘質土塊少量含む。

SD－1
1　暗褐色土。黄灰色粘質土塊少量含む。
2　暗褐色土。黄灰色粘質土塊多量含む。
3　暗褐色土。

第9図　ＳＤ－1・2




第10図　出土遺物

## 2　出土遺物　第10図

遺物は、ＳＤ－１より中世の珠洲焼・瀬戸美濃が出土しており、この他に遺物包含層中より近世の陶磁器類が少量存在する。

１は珠洲焼甕の口縁部片で、ＳＤ－１より出土している。２は珠洲焼叩打壺の胴部片で、ＳＤ－１より出土している。３は珠洲焼片口鉢の口縁部片で、内面に端部をとる。ＳＤ－１より出土している。４は珠洲焼片口鉢の口縁部片で、端部が水平となる。ＳＤ－１より出土している。５は珠洲焼片口鉢の胴部片で、内面に密な御し目が見られる。ＳＤ－１より出土している。６は瀬戸美濃の天目碗で、黒色の鉄釉が掛けられている。ＳＤ－１より出土している。７は茶壷と思われ、茶褐色の釉が掛けられている。Ｄ６区の包含層中より出土している。８は近世の擂り鉢で、茶褐色の釉が掛けられている。Ｅ６区の包含層出土である。９は近世磁器の碗である。Ｊ４区の包含層中より出土している。10は近世の灯明皿で、外面口縁部～内面に灰釉が掛けられている。Ｆ６区の包含層中より出土している。11は近世磁器の紅皿で、体部下半～底部は露胎である。Ｆ６区の包含層中より出土している。12は京焼風の碗で、緑色と灰色で図柄が施されている。白玉継ぎが認められる。Ｂ５区の包含層中より出土している。13は磁器片を打ち欠いて作られた円盤である。Ｂ５区の包含層中より出土している。

# V. まとめ

**概要**

四方北窪遺跡は、中世～近世にかけて存在した神通川旧流路に面する海岸微高地中央に立地し、第１章で述べた立地条件等から推察して、中世以降港町として栄えた「西岩瀬町」の範囲に含まれると考えられる。

今回の調査地（第１次地区）は遺跡の東端にあたり、当調査地から南へ約40ｍ地点に第２次地区(1)、西へ約５ｍ地点に第３次地区(2)が所在している（第３図）。

第２・３次地区は、既に調査報告がなされており、本遺跡との相互関連が明らかにされている。検出された主な遺跡は、第２次地区では中世の火葬場と認識される焼壁土坑や後記するＳＤ－１につながる中世段階の地割の一部と考えられる溝や穴であり、第３次地区では古代～中世の掘立柱建物跡、土坑、小穴、畑跡、道路跡、穴等である。

**遺構**

今回の調査では、中世の溝２条、掘立柱建物跡１棟、穴14基、小穴７基が検出された。この中で時期確定が可能な例はＳＤ－１のみであるが、ＳＤ－２はＳＤ－１に並走し、ＳＢ－１の柱筋はＳＤ－１の方向に概ね一致しており、いずれも中世後半の所産と推察される。穴の時期については定かではないが、遺構埋土がＳＤ１・２やＳＢ－１が暗褐色土を基調とするのに対し、穴は茶褐色土もしくは赤褐色土を基調としており、溝や掘立柱建物跡とは時期差があると思われる。

ＳＤ－１は、出土した遺物から14～15世紀代の所産となり、方向、規模、出土遺物等から第２次地区で検出されたＳＤ０１とつながるものと判断される。しかし、ＳＤ０１では溝の管理ゆえの３期の変遷が確認されているが、ＳＤ－１ではその変遷が確認されておらず、両溝の機能年代に多少の時間差があったと思われる。この溝は、第２次地区で報告されているとおり、立地条件等から推察して、中世以降港町として栄えた「西岩瀬町」の中世段階での集落と河川（旧神通川）を区画する溝で、居住地はこの溝から西側に展開するものと考えられる。

今回の調査区は、第２・３次地区と共に中世港町集落の外郭部にあたる場所である。同地区は、建物跡が雑舎的なＳＢ－１の１棟のみで、その他の遺構の分布も疎であることから、河川（船着き場）と居住地（町屋）との間に空間が広がっていた可能性があり、中世港町の一つの構造的な特徴と言えるかもしれない。

今回の調査と第２・３次地区の調査によって、中世港町集落の外郭部における利用形態とその変遷が確認された事は大きな成果となった。今後は、第３次地区以西に展開されるであろう居住地域等の資料の増加が期待される。

**遺物**

中世と近世の土器が、ビニールの大袋で２袋出土した。中世の土器は全て14～15世紀代の所産であり、ＳＤ－１から珠洲焼の甕・壷・片口鉢と瀬戸美濃の天目碗、遺物包含層から錆釉が掛けられた茶壷が出土した。近世の遺物は、遺物包含層中から擂り鉢、碗、灯明皿、紅皿、京焼風の碗、陶磁円盤が出土した。

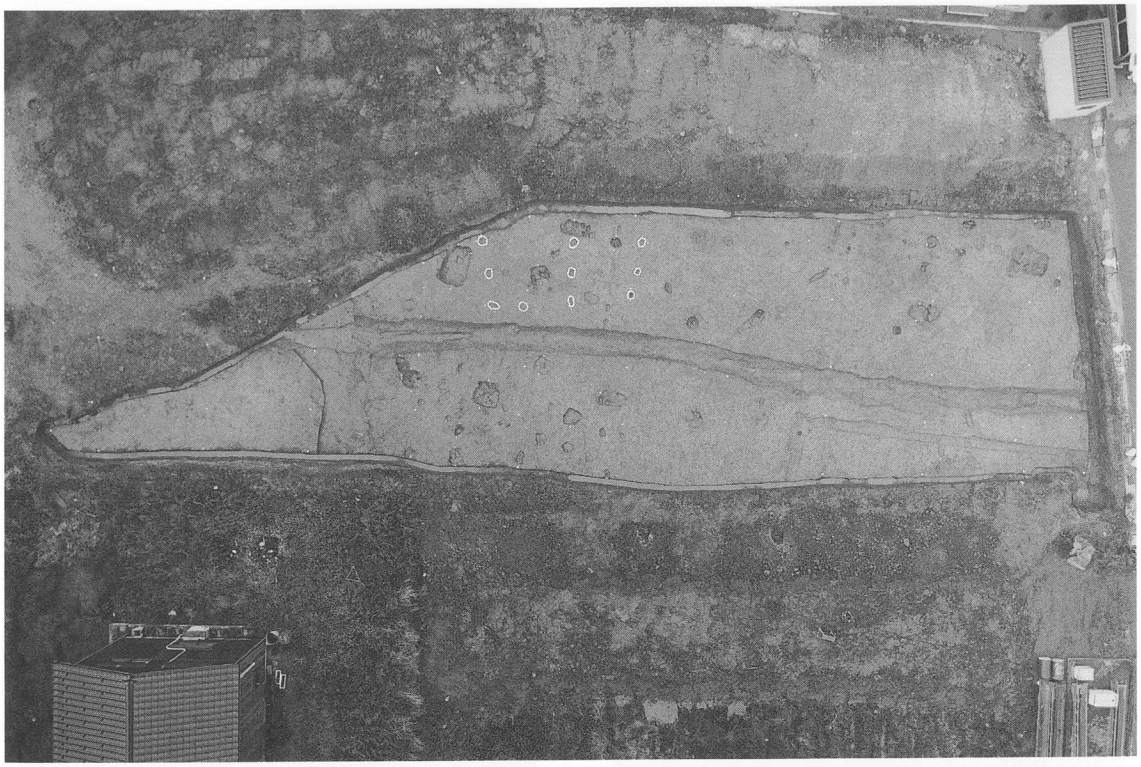
参考文献
(1) 富山市教育委員会　1998『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ　四方北窪遺跡』
(2) 富山市教育委員会　1998『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ　四方北窪遺跡』
(3) 吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

# 報告書抄録

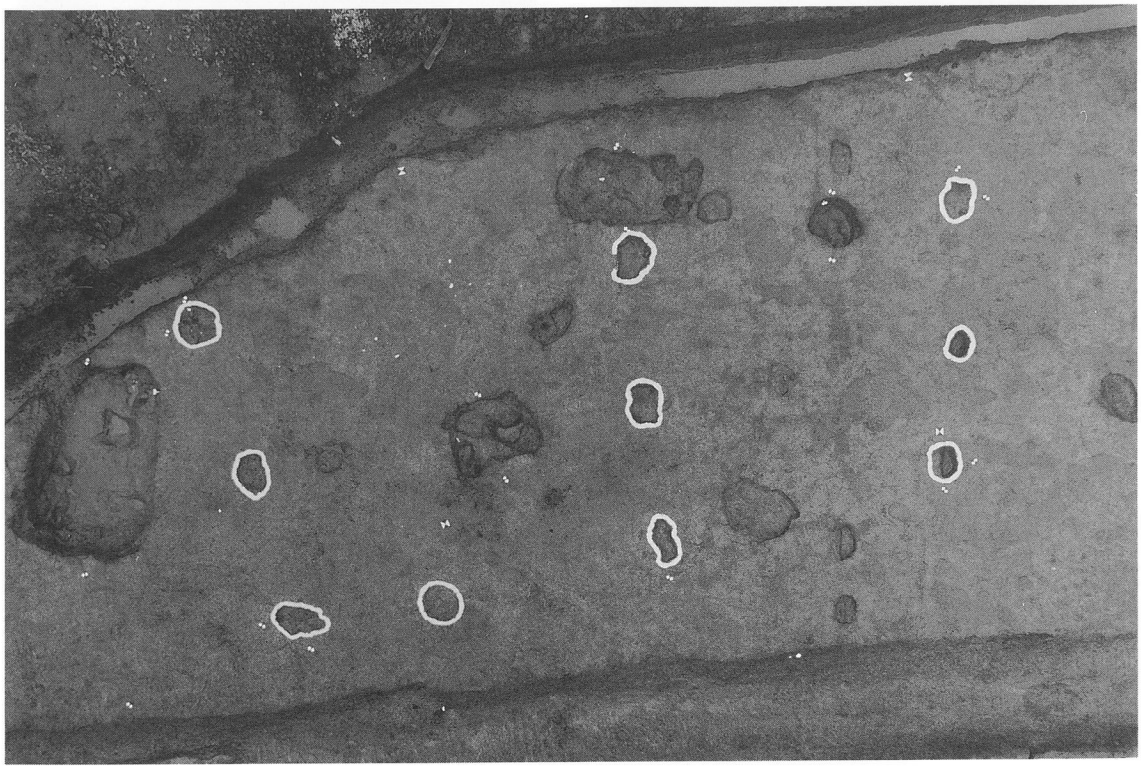
| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ふりがな | とやましよかたきたくぼいせき | | | | | | | | |
| 書名 | 富山市四方北窪遺跡 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 折原洋一・桐谷優 | | | | | | | | |
| 編集機関 | 山武考古学研究所／〒286-0045　千葉県成田市並木町221　☎ 0476-24-0536 | | | | | | | | |
| 発行機関 | 富山市教育委員会／〒930-8510　富山県富山市新桜町７番38号　☎ 076-443-2138 | | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2000年８月25日 | | | | | | | | |
| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 四方北窪遺跡 | 富山県富山市四方北窪<br>字永代割 | | 16201 | 012 | 36度<br>45分<br>10秒 | 137度<br>12分<br>10秒 | 19970908<br>～<br>19971015 | 548㎡ | 分譲宅地<br>造成工事<br>（道路部分） |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | | 特記事項 | |
| 四方北窪遺跡 | 集落跡 | 中世<br>近世 | 掘立柱建物跡・溝<br>穴 | | 珠洲焼・瀬戸美濃<br>近世陶磁器・陶磁円盤 | | | 中世以降に繁栄した港町西岩瀬町の範囲内に位置すると推定される。 | |

抄録図

図版1



1．全景



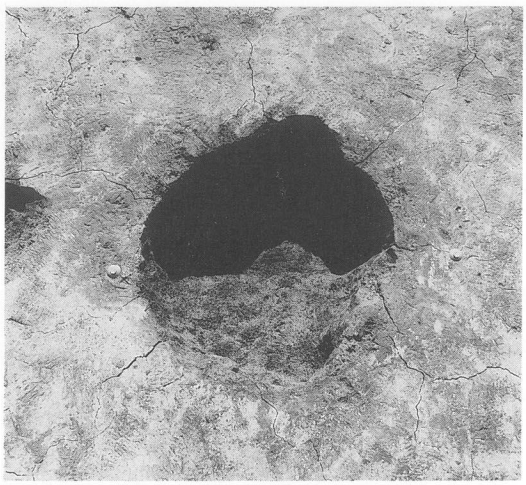
2．ＳＢ－１

図版2

1．SK－1

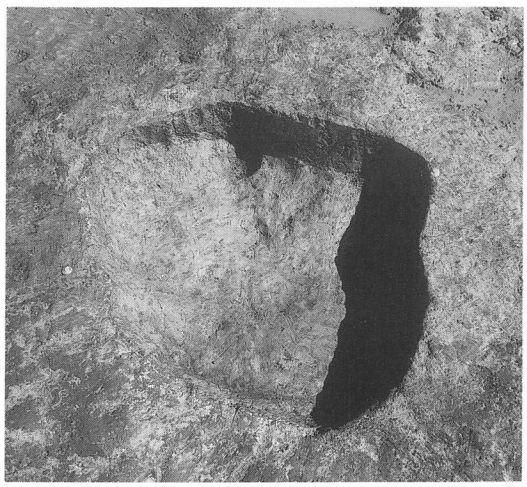
2．SK－2

3．SK－4



4．SK－5

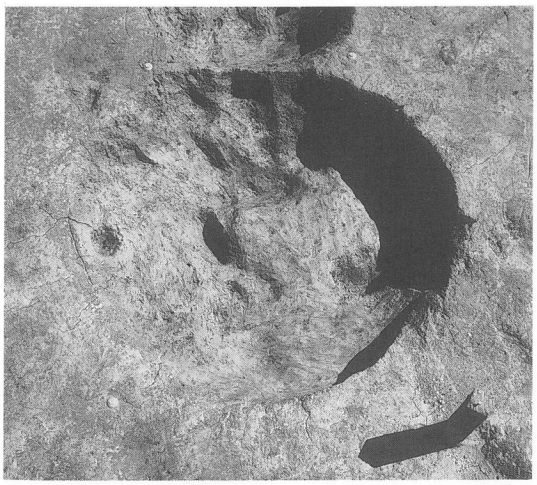
5．SK－6



6．SK－7

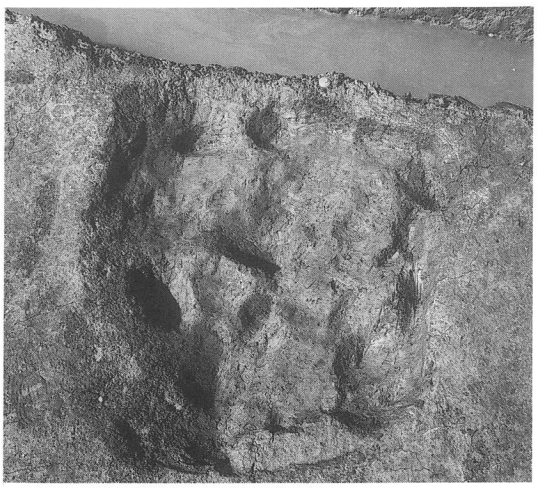
1．SK－8

2．SK－9



3．SK－10

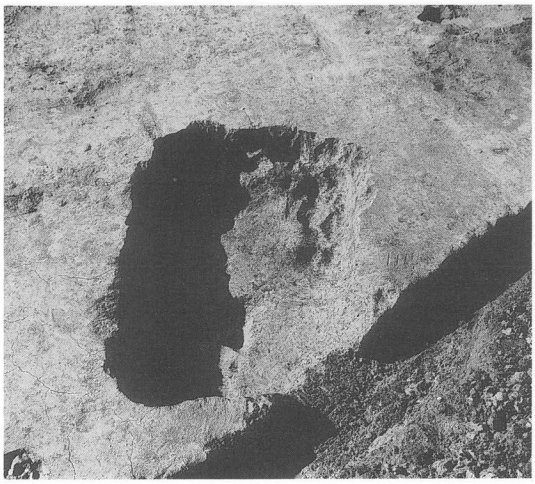
4．SK－11



5．SK－12

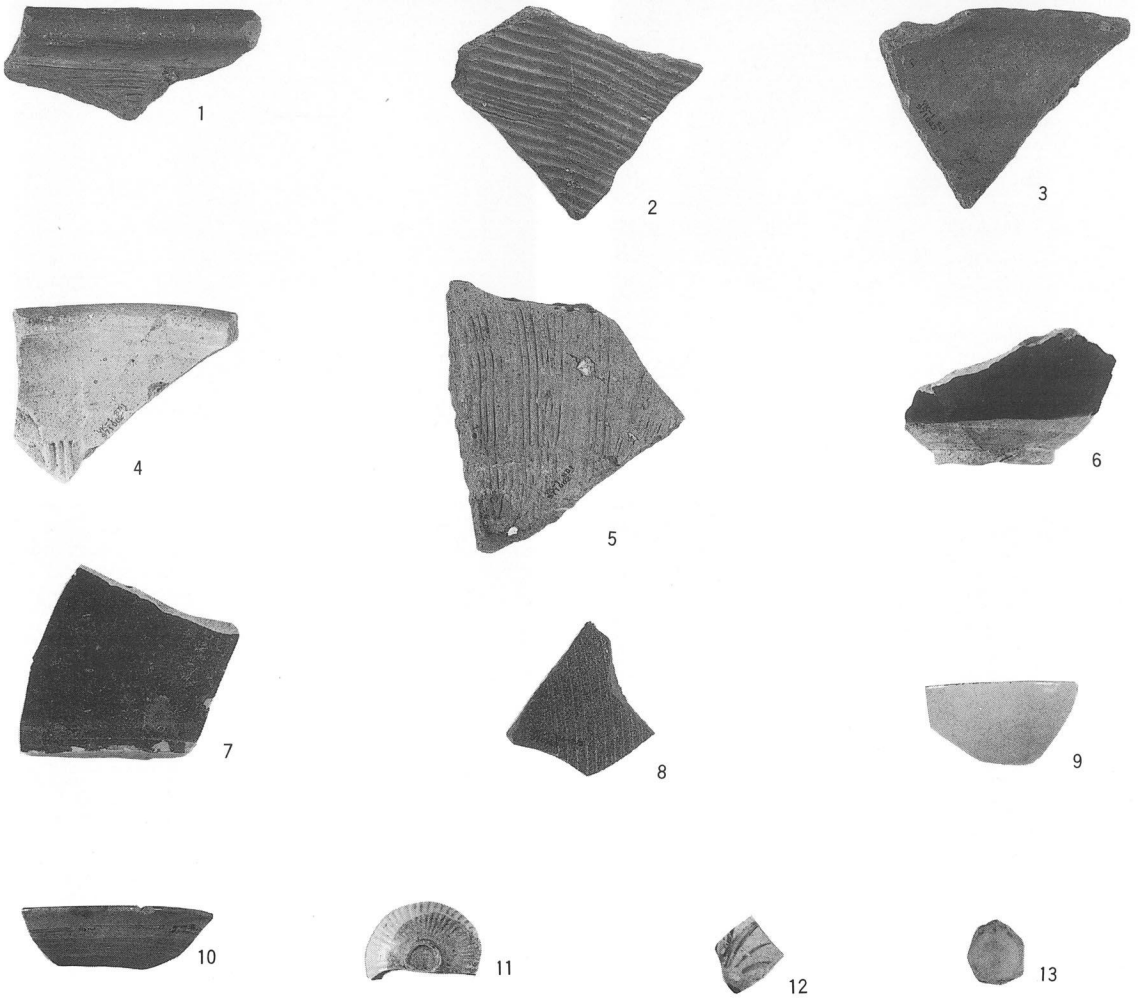
6．SK－13

# 図版4



1．ＳＫ－14

2．ＳＤ－１・２




3．出土遺物

分譲宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査
富山市　四方北窪遺跡

印刷　平成12年８月15日
発行　平成12年８月25日

編集　山武考古学研究所

発行　富山市教育委員会

印刷　㈱ 文化総合企画
千葉県印旛郡富里町日吉台1-23-12
TEL　０４７６-９３-０５９３